

パソコンのディスプレイに荒廃した都市の映像が映し出されている。

今現在俺がプレイしているのは、登録ユーザー数 1 億人を超える超人気オンラインゲームだった。

映像の中心で武器を構える男をコントローラーで操作しながら机に置かれたマイクに向かって話す。

「あ、そろそろ移動しないとヤバいですね。移動しま〜す。えっと、ちなみにさっき拾った武器は……」

画面から目を離さず視聴者に向けて実況を続ける。ゲームの配信を始めてから四ヶ月程になるのでプレイしながら話す事にもだいぶ慣れてきた。

コントローラーを握りキャラクターを動かす。と不意に、見ていた画面のコメント欄に目立つエフェクト付きの文字が現れた。

「ッッ……！」

そこには『アキ君がローターで乳首責めされてるお顔見して♡』と、投げ銭してきた視聴者のコメントが書かれていた。

「りょーかいでーす」

そしてそのコメントに俺ではなく隣で画面を見ている男が勝手に返事をする。

途端に一気にコメント欄が盛り上がった。

『キタ！アシスタントくん！』

『略してアシ君』

『これはいいギフト』

『アシ君、相変わらずダウナー系のイイ声 w』

そんなコメントや拍手のスタンプが続けて送られてくる。

その間も隣の男は淡々と準備していた。

「っ……あ……あの……〇〇さん、ギフトありがとうございます……えっと、じゃあ……コメントいただいた指示を……ンンッ♡♡」

喋っている途中で隣から伸びてきた手が俺の乳首にローターをピトリ♡と当てた。その瞬間ヴヴーッ♡♡と乳首に甘い振動が襲ってくる。

「アッアッ♡ っっ……♡ あ……い、今、ローターが、乳首に当たってます……っっ♡♡」

恥ずかしさを堪え視聴者にちゃんとコメントの指示を実行している事を報告する。

俺の配信は顔出しありだけど映っているのは肩までで、胸から下は視聴者に見えない仕様になっていた。なので本当にローターを乳首に当ててるか見てる人には分からない筈なんだけど、コメント欄はさっきよりも一段と盛り上がりを見せている。

『アキ君の声カワイイ♡』

『この声は絶対に乳首に当たってる』

『アキ君の顔と声とローターの音で充分シコれます』

そんなコメントを目にして恥ずかしさに拍車がかかった。

「うう……じゃ、じゃあっ♡ ゲームを`続けます……♡♡」

乳首にローターが当たった状態のまま俺は気を取り直してゲームを続けた。

手を伸ばし俺の乳首にローターを当てている男―友人の久我はしれっとした顔で「時間ロスしたから急げよ」などと言って、俺の乳首にグリ♡グリ♡振動してるローターを押し付けてくる。

ビクンッ♡と思わずまた手を止めてしまい、横目で隣を睨みながら『誰の所為でこんな事に……っ♡♡』と心の中で非難した。

(クソ……何で俺……こんな事やってんだろ……♡♡)

元々俺は何処にでもいるただのゲーム実況者だった。自分で言うのも悲しいが配信してる内容は何の特徴もなく、再生数も登録者数も全く伸びる気配のない、正に“底辺”と言われている配信者の中の一人でしかなかった。

それが何故こんなコメント欄が盛り上がり高額ギフトまで貰えるような事になっているのか……全ての元凶は俺の隣で平然と俺の乳首にローターを当てているこの友人にあった。

「ゲーム配信？ 桐谷そなんやってたんだ」  
「うん……でももう三ヶ月くらいやってんだけど全然登録者が増えないんだよな……」

およそ一ヶ月前、学校の教室で力なく机に伏せて俺は前の席の友人にそう嘆いた。

ゲーム配信を始めて三ヶ月、最初の頃は有名になったら自慢してやろうと学校の友人にも黙ってやっていたのだが、有名になるところか再生数二桁、よくて三桁しかない現状に恥ずかしくてゲーム配信やってるとは言えなくなってしまった。

それでもついこの友人にだけは告げてしまったのは、コイツがそういうのに全く興味が無い人間だったからだ。今も「へえ、そうなのか」と興味なさそうに返事するだけだった。が、別に何かを期待して相談した訳ではなく、ただ愚痴を言いたかっただけなので予想通りの久我の反応に俺は内心ホッとした。

（他の奴等に言ったら絶対色々揶揄われるからな……その点久我はホント楽だわ。他に奴にバラす心配もないし）

イケメンだし取っ付きにくい所もあるが、久我は一緒にいて一番楽な友人だった。

「桐谷は、その配信で人気になりたいのか？」  
「んえ？ あ、ああ。まあ、そりゃな……」

てっきりもうこの会話は終わりだと思ってたのだけど、  
久我の中ではまだ続いていたらしく戸惑いつつ頷く。  
すると久我は相変わらず何を考えてるか分からない表情  
で俺に言ってきた。

「じゃあ俺が手伝ってやるよ」  
「……………へ？」

そうして久我が提案してきたアイデアが“コレ”だった。

『今度は亀頭をローター責めして♡』

「ひっひん`ん`ん` ……っっ♡♡ あっあうっ♡ あっあ  
っあっ♡♡ や`っ……♡ゲーム`に…集中できない` ……  
♡♡」

久我が俺のズボンを下ろし下着の上からローターをチン  
コに当ててきた。

それが丁度指定してた場所に当たってて、細かな振動が  
敏感な部分を目一杯刺激してくる。

ーギフトを送ってくれたユーザーの指示通りにエッチ  
な事をするなんて……そんなの男の俺がやっても気持ち

悪がられるだけだと思ったのに、俺の予想に反して実行した初日の配信はそれまでの再生数の何十倍にも跳ね上がり登録者も一気に増加した。

それ以降も配信する毎にそれらは伸び続け、一ヶ月経った今では登録者は久我に話した当時の百倍、再生数は五桁にのぼっている。

「こら、下向くなって。みんなお前の顔見たがってんだぞ」

俺のチンコにローターを押し付けながら久我は厳しくそう言いってきた。

久我は、手伝ってやると自身が言った通り俺の配信のアシスタントを毎回してくれている。

ギフトを送ってくれたユーザーが俺にやりたい事を久我が代わりに実行するというーそんなまんまエロ配信のスタッフみたいな事を、イケメンの友人は表情を変えず淡々とこなしてくれていた。

『さすがアシスタント君、よくわかってる』

『アキくん。ガンバレ♡ガンバレ♡』

快感に震えながら必死でコントローラーを操作して、その最中に画面の端で盛り上がるコメント欄を見て余計に手が震えた。

『ホラ、実況も頑張ってる！』

最早ソレがどちらの実況の事を言っているのかすら分からなくなり、熱にうかされた状態のまま言葉を発する。

「い、いま♡ローターがチンコに当たってます♡ アッ  
アッ♡ き、亀頭が♡ローターに責められて……っっ  
♡♡ ひうゝうゝうっ♡♡ っ、〇〇さん……ギフトあ  
りがとうございます……♡♡ 指示とおり♡ 乳首ぐに  
ぐに♡されてます……っっ♡♡」

俺の口は自然と今自分がナニをされてるかを実況してい  
た。

「あゝあゝあっ♡♡ ち、ちんこの先っぽ♡ぐりぐり  
されてる♡♡ ローターの振動が……っ♡♡ あっあっ  
あっあっあっ♡♡♡」

高性能なマイクが俺の喘ぎ声を余す事なく拾い上げる。

それに視聴者は興奮して一層盛り上がる。

俺の配信を見にくるユーザーは日を追うごとにいやらし  
い指示を出してきた。

一人のコメントを実行している最中なのに、また一人コ  
メントしてきてチンコと乳首が同時に責め立てられる。

「アキ、敵に狙われてるぞ」

「ひんゝんゝッッ♡♡ やっ敵が来ちゃっ……っあゝ  
うううッッ♡♡ やゝら♡ 乳首ひっぱらなゝいでゝ♡  
♡ あっあっあゝっ……っ♡♡ だめ……やゝられ  
ちゃ……っ♡♡ っあゝああダメ♡♡もうイゝくうう  
うううっ♡♡♡」

敵が現れた焦りと絶頂が迫ってくる感覚が同時に襲って

きて頭が混乱した。

敵を倒さなきゃいけないのに快感が邪魔して実況も訳がわからなくなる。

『負けないで、アキくん！』

『ガンバレ♡ガンバレ♡』

『イク前に敵を倒すんだ！』

視聴しているみんなが俺を応援してくれる。

でも送られてくるコメントの多さにこれだけの人に恥ずかしい姿を見られてるんだと思って余計に快感が増した。

「あゝあゝダメ♡♡ 負けちゃうっ♡♡ イクッ♡ イクうゝうゝうゝうゝっ♡♡♡」

『あ〜あ、負けちゃった』

『相変わらずアキ君は乳首もチンポもよわよわだなあ』

『でもイキ顔はめちゃくちゃかわかったよ♡』

「はあ…♡♡ はあ…♡♡ はあ…♡♡ はあ…♡♡」

呼吸を整えながらぼんやりパソコンのディスプレイを眺める。

ゲーム画面には LOSE の文字と共に自分のキャラクターが倒れている姿が映っていた。

『アシ君、もうちょいカメラ引いてくれない？』



『アキ君のピクピクしてるチクビやチンコ見たいな～♡』

イッたばかりでぼうっとしているとそんなコメントも送られてきた。それに対して俺が口を開く前に隣の久我が返事をする。

「露出が多いと運営から BAN されるんでダメでーす。それじゃ、アキもイッたんで今日の配信はこれで終了します。ほらアキ、惚けてないで挨拶」

(……いや……露出してなくても絶対アウトだろ……これ……♡♡♡)

断る理由に心の中でツッコミを入れつつ、久我に促されてお決まりの挨拶を口にした。

「きょ、今日も……♡♡見てくれてありがとうございます……♡♡ よければ……お気に入り登録お願いします……♡♡♡」

ヴ…ヴ…ヴ…ヴ…ヴ…ヴ…ヴ…ヴ……ッ♡♡♡

「フ～～♡♡ フ～～♡♡ フ～～♡♡ む、向こうに……人がいるみたいですね……♡♡ わ、罨かも…

しれないので……っ♡♡慎重に……ん`ん` うう……っっ♡♡」

『アキくんも中にローター入れるのだいぶ慣れてきたね♡』

『今どこら辺にローターがあるのかな？』

「っ……いま……ローターは……ぜ、前立腺の上の方にあります……っ♡♡ ～～っ、強さは、弱です……、あっ、うう……♡♡ っ、〇〇さん、ギフトありがとうございます……♡♡ ローターの振動を上げ……っあ`あ`あ`あ`あ`っ♡♡♡」

〇〇さんからギフトを頂き、そしてそのコメント通りに久我がローターの振動レベルを上げる。

その瞬間中に入ってるローターがヴヴヴヴヴッ♡♡♡と尻の中で強く震え中の肉を目一杯揺らした。

今日も視聴者からのギフトによって俺はいやらしく喘がされている。

しかも今日は配信を始めて最初のコメントで『お尻の中にローター入れて♡』と指示され、ずっと中にローターを入れたままゲームの実況を続けていた。

ローターのリモコンは久我が持っていて、強さをどの程度にするのかはコイツの意思に委ねられているのだけれど、久我は容赦なくそのリモコンで振動のレベルを上げてしまう。

「ハア…♡ ハア…♡ ハア…♡ こ、このまま……進みます……っ♡♡ ん`ん`ん`…っ♡♡ つ、ふう…ふう…♡♡ え、えっと、向こうの人に話しかけ……っ！？♡♡」

コントローラーを持ちゲームを進める。一層強くなったローターの振動に息を乱しながら頑張ってゲームの実況をする。そんな時にまた、視聴者からギフトが送られてきた。

「あ……〇〇さん……い、いつもありがとうございます……っ♡♡ で、でも……もう、中にローターが入って……♡♡」「アキ」「っ……うう……♡♡ わかりました……♡♡ じゃあ……もう一つ……入れます……♡♡♡♡」

今度の指示は『もう一つ中にローターを入れる』だった。一つだけでも充分快感に苦しめられているので俺は断りたかったんだけど、そうすると久我が咎めるように横から声をかけてきて仕方なく了承するしかなかった。

コメント欄がまた盛り上がるのを視界の端に捉える。

『さすが〇〇さん、鬼畜代表 w』

『アシ君もキビシイ ww』

『アキくん、実況ヨロシクね♡』

そんなコメントを無表情で確認して久我は手に持ったローターを俺の尻に向ける。

ぐにゅり♡♡

「ひうう……っっ♡♡ ローター、入り口に押し込まれて……ぐにぐに〴〵されてます……♡♡ っん〴〵ん〴〵ッッ♡♡ いま、ローターのスイッチが入れられました……っ♡♡ な、中のローターも振動しててっ♡♡ 二か所で震えてます……っっ♡♡♡」

入り口にヴヴヴ……♡♡と振動しているローターを押し付けられ、中にあるローターもヴヴヴヴ〜〜〜ッッ♡♡♡と目一杯振動していて、中と外から刺激されてる感覚に身体がジン♡ジン♡痺れた。

久我はしばらく入り口をローターで刺激してて、その時にふと、送られてきた一つのコメントが目につく。

『アシ君は俺らには見えないアキ君のアナルもチンコも乳首も全部見れてるんだよな〜うらやまし〜!』

「っ……!♡♡ う〴〵う〴〵う〴〵……♡♡♡」

ローターを俺の尻孔に押し付けている久我には、当然俺の孔もチンコも見えてしまっていた。それに乳首も、服を捲られて直接弄られる事もあるのでしっかりと久我に見られていた。

友人に恥ずかしい場所を全部見られてしまっているのを改めて自覚させられ、込み上げる羞恥に尻孔がピク♡ピク♡反応して震えるローターを食い込ませる。

「っあ〴〵あ〴〵あ〴〵あ〴〵あ〴〵ッッ♡♡♡」

そのタイミングでニューブン♡♡とローターが中に侵入した。

友人に全てを見られ恥ずかしさに震える俺とは対照的に、久我は平然とした顔で俺のソコを眺め平然とした顔で二個目のローターを挿入してしまった。

「ロッ、ローター、入りました……ッ♡♡♡ に、二個とも……中で動いてます……っ♡♡」

「アキ、ゲームも進めないと。このままじゃクリアできないぞ」

「あう…♡♡ あ、と、扉が……あるので、開けてみま  
す……っ♡♡ ツッ！？ っひんぐんぐん ツ♡♡♡」

今回俺がプレイしているのはホラーゲームだった。

操作してるキャラクターが扉を開けた瞬間恐ろしい顔のゾンビが現れ、それに驚いて思わず中をギュウウツと締めつけしもう。

その拍子に奥へと移動した二個目のローターが、中のシコリの部分にヴヴヴヴ……♡♡と無機質な振動を当ててきた。

「〜〜ぜッ♡♡ 前立腺にローターが当たって……  
ッ♡♡♡ ダメッ♡♡ ああぁあッ♡♡  
♡」

駄目だと言ってもただのローターが言う事を聞く訳もなく、しかもリモコンを握っている久我は「早く逃げないとやられるぞ」と淡々と注意してくるだけだった。